

私の尊敬する人

山本七平

人が人を尊敬するという場合、いろいろなケースがあると思います。尊敬するというよりむしろ宗教的な尊崇もしくは崇敬という場合もありましょうし、また憧憬という場合もあると思います。こういう形と違って、もっと身近な自分の師表または模範という場合で尊敬していることもありますが、いまま生涯教育などというところが言われておりますが、それならば生涯師、生涯の先生、という対象があってもよいと思います。人がそれぞれ身近にあつて尊敬する人と言えは、当然先生という人になりまして、従つて私がそういう意味で最も尊敬する人はだれかと言われれば、生涯の先生ということになりまして、その場合ごく自然にその名があつてくるのは、塚本虎二先生です。

先生はNHKで聖書の講義をされたことでもありますので、ご存知の方も多いと思います。この面の先生の業績

はすでに多くの方が語っておられますので、きょうは先  
 生の生き方と……いますか、生活哲学と……いますか、ある  
 いは人生のいろいろな問題への処し方、そういうった面  
 おきまして私が最も多く学んだ点、そのような点につ  
 てお話ししたいと思えます。  
 先生は一八八五年、明治十八年になります、福岡で  
 生まれられ、……いで一九〇四年旧制の一高に学ばれまし  
 た。非常な秀才で……ゆる独法科で終始首席を通された  
 そうであります。そのころ内村先生の「基督教問答」を  
 お読みになり、……いで東大には……内村先生の  
 門下にはいられて、柏会というグループにはいられまし  
 て聖書の研究をされました。一九一一年に東大を卒業さ  
 れますと、農商務省には……いて足かけ九年間つとめられ  
 ております。その間独学で熱心に聖書およびギリシャ語  
 ヘブライ語を学んでおられました。先生が三五歳の時  
 一九一九年に農商務省を辞職されました。これは当時相  
 当な事件であつたらしくて朝日、毎日両新聞にも大きな  
 記事が出ております。この記事の中に先生の談話も出て

キリスト教常識

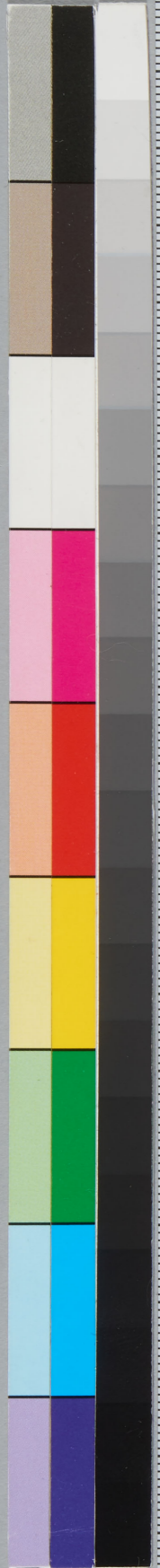
25 x 18

15

10

5

25



おりませんが、これは先生の生き方をよく示していると思  
 われますので、その部分を読んでみたいと思います。  
 記事はいわゆる四段抜きのトップ記事で、最初に大き  
 く写真がありました。そのつぎの見出しが、「実生活の  
 不安から霊に目覚むる新日本 米問題に努力した塚本参  
 事官を始め高等官が続々辞職して伝道師に」となってお  
 ります。この見出しを見ますと、塚本先生がきおい立っ  
 てなにかをされようとしているように見えますけれども  
 その中の塚本先生の談話を読んでみますと、これとは印  
 象が違います。その部分を読んでみます。  
 農商務省にはちょうど七年間つとめました。私が  
 内村先生についてキリスト教を知るようになったの  
 は、まだ大学時代のことです。人間は自己の職業に絶  
 対的満足を持たなければならぬ、ということを常に  
 先生から言われていた。官吏という今までの職業に  
 も興味を持たなかったのではないが、しかし既往の  
 生活を振り返ってみると、私はまだ一度も真つ裸に  
 なって真剣勝負をしたことがない。私は役人である

キリスト教常識

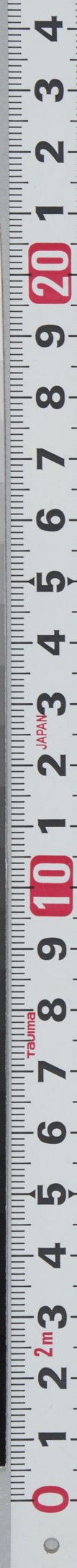
25 x 18

15

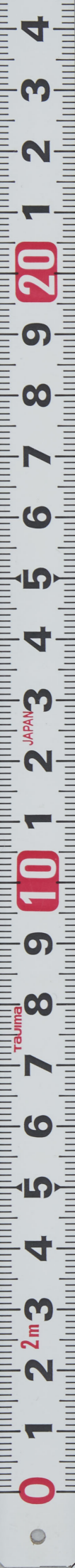
10

5

25



に絶対的満足を持たなければならぬ、これが先生の恐ら  
 いう。この先生は言われております。この中の、自己の職業  
 に出るとのこと、私は極めてあっさりした考えを持って  
 の伝道は聖書研究の華であり、研究中に自然に溢れ  
 をやると明確に目的を定めたわけではないが、狭義  
 うなるか、やって見なければわからない。かつ伝道  
 ある。とにかくイロハから始めるのだから、将来ど  
 に働ける余地を見出すことが出来ると思つたからで  
 本来の仕事のように思われ、またそこに比較的真剣  
 とになったのも、この聖書の研究というところが自己  
 こされた。こんど役人をやめて宗教生活にはいるこ  
 始めたのであるが、この方には非常な興味が引き起  
 で役所の片手間にギリシャ語の稽古や聖書の研究を  
 の空虚をもつて占領されていた。それで私はこれま  
 れが非常にさびしく感じられて、私の心は常に一種  
 ても真剣勝負をやり得ようと思われなくなつた。そ  
 限り、私の生活の道程においてこの先いつまでたつ



く生涯の生き方であろうと思ひます。

もう一つ、何かを人に語るために何かをしているので  
はない。自分が研究をしていけば、おのずから溢れ出る  
ものがあり、この溢れ出るものがあつたら、それを人に  
語る。こういう考え方をしておられますが、これも生涯  
先生がこの通りにされたことだと、私は考えております。  
先生はこのようにして農商務省をおやめになつた。先  
生は農商務省におられる時に、米の問題で尽瘁された。  
これは大きな業績だと、当時を知る人が言っておられま  
す。先生はそれらの仕事を全部やめられて、鎌倉に退  
て、おっしゃられた通り聖書の勉強に専念されたわけで  
す。

一九二一年に斎藤秀三郎氏の令嬢と結婚されました。普  
通の家庭生活にはいられたわけですが、二三年の九月一  
日に先生は大震災に遇われました。生後一年余と三か月  
余のふたりのお子さんを残して夫人が圧死されました。  
これは先生にとって非常に大きなショックだつたと思わ  
れます。その時先生は三八歳で、一体これはどういふ事

キリスト教常識

25 x 18

15

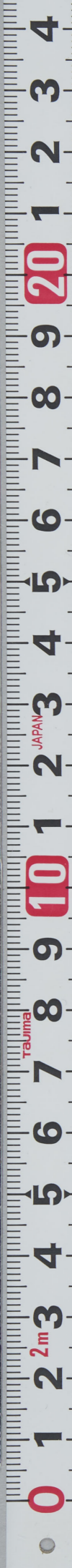
10

5

25

なのか、神の愛と言われども一体それはどういふ事な  
 のかと、長い間この事を考えられた。これが恐らく先生  
 の一生の最も大きな転機であったと思われます。先生が  
 いわゆる伝道といひますか、公開聖書講義を始められた  
 のはこれが動機であったと言われております。先生はそ  
 の年の一一月から内村先生の伝道の手伝いという形でそ  
 れを実行に移されました。初めは午後の集会、のち午前  
 午後二回の集会で聖書の講解をされ、また内村先生の聖  
 書之研究誌にも毎号のように約四年間投稿されておられ  
 ます。その他教会などでもずいぶん講演をされておられ  
 ました。  
 ところが二五年になりました、内村先生の門下の方々  
 がギリシャ語の研究をしたというのでギリシャ語研究  
 会を始められ、先生はそこの講師としてギリシャ語を教  
 えられた。現在日本で新約・旧約両言語の権威といわれ  
 る方々の多くが、この時の先生のお弟子であります。こ  
 れは日本における非常に面白い例であります。こういふたぐ  
 ループがあつて、そこで一つの研究会ができて、そこか

キリスト教常識



ら後にその方面の学者が出てきた。これはほかにな、例  
 だと思えます。先生はそこでギリシャ語は勿論のこと、  
 ヘブライ語もラテン語も、それからダンテの神曲、その  
 他の古典も教えられました。ダンテは聖書とともに先生  
 が生涯愛読された本であります。

その後内村先生に切望されました、二九年の秋から内  
 村先生がやっておられた柏木の集会の延長の意味で衛生  
 会館で聖書の研究の集会を始められました。これがその  
 後先生がほぼ生涯続けられました聖書集会の始めであり  
 ます。同時に先生の個人雑誌「聖書知識」を発行されま  
 した。私が先生の影響を一番強く受けましたのは、実は  
 この「聖書知識」からであります。「聖書知識」は厚い  
 雑誌ではなくて大体二〇頁から三〇頁までで、毎月発行  
 されておりまして。私は物心ついた頃からこれを読んで  
 おりました。しかしそんな真面目な弟子であつたわ  
 けではなく、先生がその中で書かれておられる断片録と  
 か雑感雑録とかいったような、そのときどきの時評とし  
 くは先生の身边雑記、身边のさまざま細かい問題をど

キリスト教常識

う処理したかといふような部分にむしろ興味をひかれて  
 ありました。後年先生にお会いした時にそのことを申し  
 上げましたら、きみはあれしか読まなかったんじゃない  
 のかと言って、先生が笑っておられました。これは何で  
 もないようでしたけれども、先生にとっては聖書を講解  
 する場合も、身の事を処理する場合も、まったく同じ  
 一つの基準であることを知ったのが、私には先生に対す  
 る大きな魅力でした。

先生は長い間聖書の研究と、最初に述べましたように  
 内から溢れたものを人に伝えることで、その生涯を送っ  
 て来られたわけですが、六〇年の夏にご病気にかかられ  
 まして、その後小康を得ましたけれども再発されて、六  
 三年の六月で長いこと続けられました。聖書知識も休  
 刊され、その後闘病生活を続けておられました。一九  
 七二年九月九日ついになくなられたのであります。

この先生の生涯は一言にして言いますと、実に自然で  
 ありまして、淡々としており、ある面では一切の無理と  
 いふものがあります。一切の無理のない生涯を送るこ

キリスト教常識



とができた、その一番底にあるものはやはり先生のキリスト教への信仰だと思えますが、それ以外に先生の生き方ないしは日常生活問題の処理の仕方、それを貫く一つの強い生活哲学と申しますか、生き方の基本があったと私は思っております。

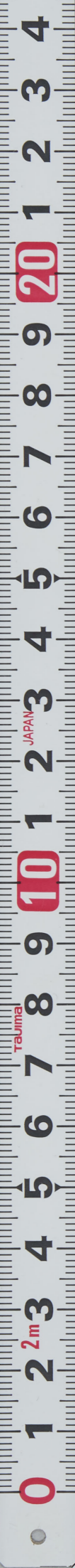
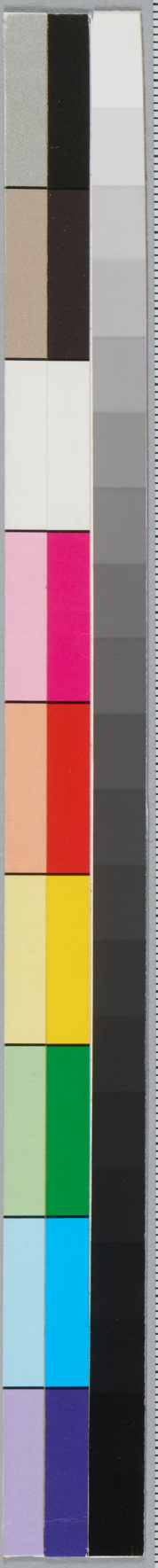
以下それについてお話したいと思えます。これを箇条書きのようにしてみますと、つぎの五つになるのではな

いかと私は考えております。まず第一が塚本先生にはまったく虚勢がないこと。虚勢を張るといふ点では、先生は文字通り皆無と言ってよいと思えます。例えば日本を背負って立つとか、乃公出でずんばとか、こういった感じが先生には一切なくて、自分の中に溢れ出るものがあつたらう人に語る、しかしそ

うでないなら生涯沈黙してもいいと、先生はこういう態度で一生を通されたと思えます。第二の特徴は、先生が自分で自分を律している規準しか発言されなかつた。これはある意味では非常に珍しいこと

です。珍しくあつてはいけな

キリスト教常識



それは自分なら恐らくその時そうしてしまふのではない  
 間違いにあります。先生の場合は何をあつしやつても、  
 そういうことを考えて先生のことばを読むと、かえつて  
 はこう言っておられるが実際はこうではないんだらうと  
 きする必要はないし、また棒引きしてはならない。先生  
 争中の先生の発言です。先生の発言はどんな時でも棒引  
 っておりません。それが強くあらわれてゐるのが、逆に戦  
 だと、こういう一つの強い信頼感を先生に対して私は持  
 ております。塚本先生は非常に抽象的な問題を扱つても  
 大丈夫だし、最も世俗的な問題の判断を仰いでも大丈夫  
 見て失望することがあります。塚本先生に関する限り、  
 こういう失望は生涯味わされることはない、と私は思つ  
 ることなのですが、私達は時々ある人のそういつた面を  
 うものに全然差がない。これは、こうでない、非常に困  
 先生像と、家庭内における個人像と、いいますか、こうい  
 ふうに規準を分けておられない。従つて表にあらわれた  
 れは人に語る規準、これは自分で生活する規準、という  
 珍しいと私は考えております。先生はどんな時でも、こ

キリスト教常識

かど、そういう規準で言っておられる。これはある面  
 言いますと絶対に偽善がないということ、偽善がない  
 ことが逆に人々に不満を与えている点もあつたと思いま  
 す。戦後先生に対する批判が実はあるのですが、その批  
 判とか非難が、逆にある面ではこのことを証明しており  
 ます。もつともある種の批判は、その人の聖書の勉強が  
 実は足りないのので、先生が聖書のことばを取って逆の意  
 味を言っておられることが理解できない、という場合も  
 あります。そうでない場合も、これはむしろ先生がその  
 時、そう感じられ、自分ならその時、そうするであろうとい  
 う規準でしかものを言われなかつた、この一つの大きな  
 証拠である。私は考えております。人間一生、せつたい間  
 違つたことを言わない、ということは、実際できないこと、  
 して、誰でも間違つたことを言うわけですが、この場合  
 一見間違つたことを言つてない、ように見える人は、実は  
 本当のことを言つてない。この場合が実は多いのです。  
 塚本先生にはこれが一切ありませんでした。先生は陛下  
 第三に先生はどの面でも差別がなかつた。

キリスト教常識

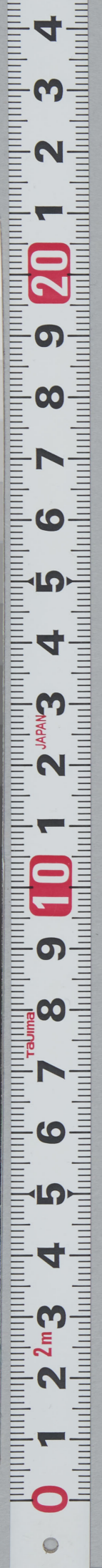
25 x 18

15

10

5

25



の前で聖書の御前講義としておられますが、同時に非常に  
 に貪しい結核の療養者、そういう人の前でも同じように  
 聖書の講義をしておられる。この両者に対して、どちら  
 からの意味でも、なんら差別というものが無い。だれで  
 も聖書の話を聞きたいと言って行けば、先生は事情の許  
 す限りそれに応じられた。ただこの差別がないというこ  
 とは、人を機械的に、いわば教条主義的に平等に扱った  
 のではないのです。これは非常にむずかしいことだと思  
 います。先生は差別がなかったから、人に対して言う  
 ことは全部各人違ったわけです。これは人間各人別々  
 ですから、同じことを言えば逆に差別になるわけですが  
 先生にはそれがなかった。これは先生のあるお弟子さん  
 ですが、その人がキリスト教の信仰を得た、がどうすれ  
 ばいいかと先生に質問した場合、即座に、ギリシヤ語の  
 研究をなさい、という面白い返事をしておられます。  
 ただこれはその人に対して言われたのであって、私はそ  
 の方を存じておりますが、なるほどこの人に対しては先  
 生はそう言われるはずだ、という気がいたします。これ

キリスト教常識

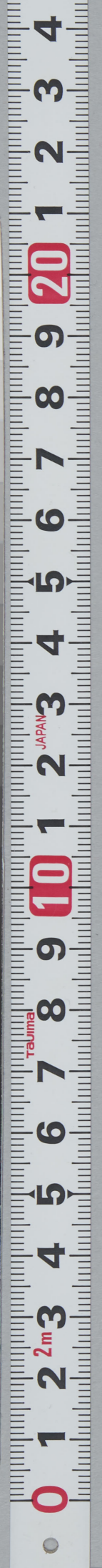
25 X 18

15

10

5

25



を一つの公理のようにして、ギリシア語の研究ができた  
 い人間は聖書の勉強もキリスト教の信仰も得られな  
 だ、という意味で先生は言われたのではないのです。こ  
 のことを先生はよく知っておられて、すべての人に対し  
 て忠言が全部違っておりました。これは簡単なように見  
 えませんが、実際にはなかなかできないことであって、本  
 当に人を平等に扱うことは実はこの差をはつきりわきま  
 えていることだ、と私は考えております。  
 第四に先生には一種の完全癖とも言うべき面がありま  
 した。今になつてみますと、かえつてそれが私達にとつ  
 ては残念なような気もいたしますが、先生は完璧を期す  
 るまでなかなか出版をなさらない。先生の生涯の中の大  
 きな業績の一つである「イエス伝研究」なども、先生は  
 これを改訂するおつもりであつたらしく、まだ本になつ  
 ておりません。こういふことは私もいって、は一種残  
 念なこととも言えますが、しかし自分で出版の仕事をや  
 っておりますと、これが実際にはどんなに大変なとか  
 がつくづくわかります。もうここでもいい、ここをやめて

キリスト教常識

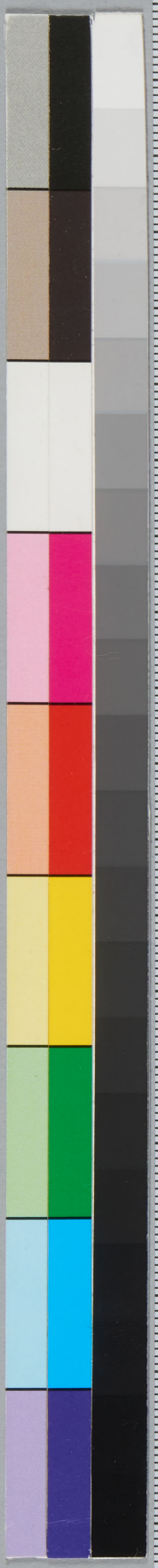
25 x 18

15

10

5

25



しまおう、これだけやったんだからあきらめよう、こ  
 で本にしてしまおう、という誘惑は実に強いのでありま  
 す。これと戦うことは、並大抵のことではないのです。  
 出版の仕事をやってみますと、これは先生にとって大変  
 な戦いであつたらうとつくづく感じます。みんなからあ  
 れを早く本にしてくださいとか、これを読みたいとか、  
 これをまとめてくださいとか、そういう要望があればあ  
 るけど、それをうんと言わないで、最後まで自分が力を  
 出し切つて、これ以上もう方法がないというところまで  
 一つの事をやられた。これは実際にやってみると大変な  
 ことであります。ただ先生はこれを生涯当然なことによ  
 うにしてやって来られて、一生それで通された。これは  
 実際になかなか出来ないことであります。  
 第五に、これは虚栄心と似ておりますし、虚勢とも似  
 ておりますが、自分にとっては何でもないと  
 いったようなゼスチュアを先生は一切されなかつた。こ  
 れが実は私などは若いころ先生に持つてゐる一つの不  
 満だつたわけです。先生は苦勞された時に、私はこれだけ

キリスト教常識

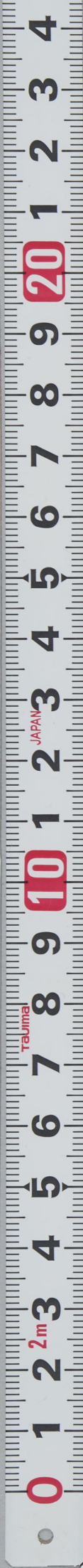
25 x 18

15

10

5

25



苦心した、これだけ苦勞した、これはこれぐらゝ大変な  
 仕事であつた、ということを平気で書いておられる。私  
 は若かつた時代に、先生はこんなことは一切言わないうで  
 何でもないような顔をしてそれをすつとみんなに提示さ  
 れたら、もっとカツコがいゝんじやないかという気がい  
 たしました。ところが今になつてみますと、そういう態  
 度をしたという誘惑は、私などでも実に強いんです。  
 みんなにとつてはこれは大変なことかも知れないが、私  
 にとつてはこんなことは何でもないという格好は、だれ  
 でもしてみたくなるものです。先生はこれを一生まつた  
 くやられなかつた。これは何でもないことのようにですが  
 非常に大変なことだと、この年になつてつくづく感じて  
 おります。  
 以上のようなことを五つ箇条書きにしたわけですが、  
 その一番奥にあるものは何かと言いますと、これは内村  
 先生の教えと同時に先生の岳父であられた齋藤秀三郎先  
 生の影響と思ひます。が、人間というものは生涯何かをす  
 るものである、絶対的に人間というものは何かになるもの

キリスト教常識

25 x 18

15

10

5

25

20

10

2m

10

20

30

ではない、そのことを非常にはつきり知っておられたの  
 だと私は思います。これは聞いた話ですが、その昔内村  
 先生が座談の時に、大きくなったら何になるの？と子供に  
 聞くこと、これが将来日本を大きく誤らすだろうと言わ  
 れ、その人間がなる対象というものは貴族と乞食しかな  
 いと言われたそうであります。人間は何かをするものだ、  
 何かをするのと何かになることは別であって人間は  
 絶対何かいになると考えてはいけません。このことは確かに  
 内村先生の教えとしてもあったでしょうが、恐らく英文  
 学者の斎藤秀三郎氏の日々というものの、これが塚本先生  
 への大きな影響であったと私は思っております。先生に  
 は「斎藤の父」という題の斎藤秀三郎先生の思い出があ  
 りますが、これを読んでみますと、斎藤先生自身が生涯  
 英文学・英語学をする人であった。それをすると、この  
 とだけが一生であって、何かになるという気がなかつた。  
 これはいろいろな面で最近考えさせられることですが、  
 例えば参議院議員になる、そのために買収をするという  
 こと、これは本末転倒であって、人間は本当の意味の政

キリスト教常識

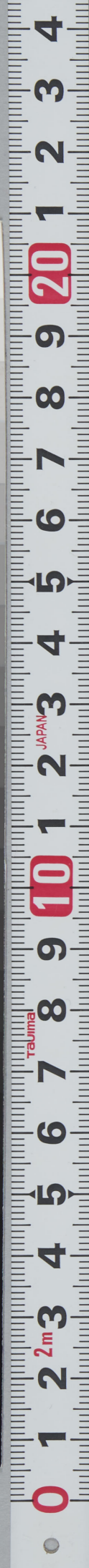
25 x 18

15

10

5

25





治的行為をする、そのするといふことに意味があるので  
 す。何かになる、何かになるために何かの不正をする、  
 これが確かに内村先生が言ったように大きく日本を誤ら  
 せていると思います。こういう点で塚本先生も生涯する  
 人であつて、絶対何かになる人ではなかつた。従つて先  
 生にはある意味で一生肩書がなかつたわけです。農商務  
 省官吏といふ肩書はあつたでしょうが、先生の仕事にお  
 ける肩書といふのは一生なかつたわけです。  
 また先生は最後まで自分があらゆる面から自由であり  
 たいと、そう思われたのだと私は思います。これはまた  
 先生の一生を規定してゐると思ひますが、これが実際に  
 は非常に大変なことだといふことを先生自身も語つてお  
 られます。ある人から、先生は言ひたいことを言ひ書き  
 たいことを書いて全くいゝご身分だ、と言われた時に、  
 先生は、それならばきみとそれをやつてごらんさい、  
 ダモクレスの剣の下にゐるようなもので普通の人なら一  
 分間も持たないだらう、と言つておられます。これはそ  
 の通りでありまして、ある意味で人間は組織の一員であ

キリスト教常識

るとか、一つの集団を作る方が簡単なことなので。先生は生涯いろいろなゆる組織に一切加入されなかった。無肩書無組織でひとりの個人として先生は行動された。これは今我々にとって、組織に加入しても加入していかなくても、一つの心構えとして最も必要なことではないかと私は考えております。  
 我々は師を乗り越えるということを簡単に申します。師を乗り越えなければ意味がないことも事実であると思っております。しかし師を乗り越えるということは、師の片言隻語をとらえて、これを批判して、それで師にまさったような錯覚を抱くことではないと思えます。それが結局自分が本当は師を乗り越えることができなくて、投げ出してしまったことには過ぎない。実際に師を乗り越えるということは、弟子はその師にまさらずに、ということばを本当に銘記して、はじめて出来ることであるというところは、実はこれが考えております。考えたいと言ふよりも、実はこれがまた私が塚本先生から受けた一つの影響であります。先生は内村先生を乗り越えるというふうなことは生涯言

キリスト教常識

25 X 18

15

10

5

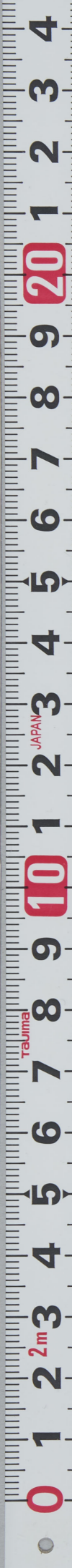
25

5

10

15

20



われなかつた。確かに聖書の学問的研究とくに新約ギリ  
 シヤ語とかヘブライ語における研究で、先生は大きく内  
 村先生を乗り越えておられる。しかし、その先生が本当  
 に内村先生を乗り越えられたということは、結局先生が  
 最後まで「弟子はその師にまさらず」ということばを銘  
 記していたからだと私は思っております。ですから私は  
 私の師である塚本先生に対して、自分は生涯「弟子はそ  
 の師にまさらず」と考えておりますが、本当にそう考え  
 っづけ、その通りにしていったら、あるいはまた塚本先生  
 のようになれるのではないかと、そう思っているわけで  
 す。

キリスト教常識

25 x 18

15

10

5

25

